新制女子修身教本

卷二

46
110
昭3

40577
教科書文庫
4
110
42-1928
20000
65677

資料室

昭和三年二月十五日
文部省檢定濟
高等女學校修身科用

湯原元一著

新制 女子修身教本

株式会社 東京開発株式会社

46
110
083

天祖の神勅

豐葦原の千五百秋の瑞穗國はこれ吾が
子孫の王ときますべき地なり爾皇孫就て
治らせさきく寶祚の隆えまさんこと天
壤と與に窮なかるべし

広島大学
教
65677
図書

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益〻國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ內國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益〻更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ

抑〻我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

內閣總理大臣副署

詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ揭ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誡ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕卽位以來夙夜兢兢トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交至レリ

輓近學術益〻開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ擧クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛

共存ノ誼ヲ篤クシ入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽

攝政名

大正十二年十一月十日

各國務大臣副署

新制 女子修身教本 卷二

目次

一 抑へよ、そして支配せよ……一
克己自制
二 眞實を愛する心……六
虛偽
三 約束を守れ……一一
四 自ら侮るな……一七

自重

五　恥を知れ……二一

六　責任を重んずる心……二五

その轉嫁

七　自慢と嫉妬……三〇

八　油斷大敵……三四

得るは難く、失ふは易い

九　失望するな……三九

一〇　眞譽と虚譽……四三

一一　社交……四七

一二　禮儀作法……五一

一三　尊敬しあひ讓りあへ……五六

一四　敏活……六一

一五　落ちつきと品位……

一六　身體のきたへ……七二

一七　清潔……七六

衞生

一八　讀む物、見る物を擇べ……八二

小說の利害

一九　聖世三代（上）……八九

二〇　聖世三代（下）……九四

追録……101

新制女子修身教本　巻二

一　抑へよ、そして支配せよ

克己自制

「抑へよ。」といつても、人を抑へようとすると反抗するから、これを自分の意のまゝに支配するわけにゆかぬ。またそんなことをする必要もない。たゞ我等が善い人、正しい人にならうと思ふなら、ぜひこれを抑へつけて、我等の思ひどほりにならせねばならぬものがある。それは

抑へねばならぬ慾

我等自身の中にあるいろ〳〵のよくない慾である。慾が勢を得て逆に我等を支配するやうになると、我等は人としてはもう敗北者だから、人なみに自主獨立してゆくことができぬ。

我等が抑へねばならぬ慾には、金錢慾・名譽慾など數限りなくあるけれども、それが一時に起つて我等を苦しめようとするわけではない。多くは年齡の長ずるに從つて、つぎ〳〵に起つて來るから、そんなものはその場合になつてから抑へるやうにすればよい。たゞとりわけ多く青年の頃に盛である慾の抑へ方については、當面の問題として今日に於て十分よく考へる必要がある。

胃

まづ胃の慾、これを抑へることは年が若ければ若いほど大切である。この慾の強いために、どれだけ多くの青年がなやまされてゐるか知れぬ。ところが、これを抑へるのはたやすさうで、實はなか〳〵むつかしい。衞生上の理窟はよくわかつてゐても、いざといふと、勃發する慾の勢に捲きたふされてしまふ。

舌

次に支配せねばならぬのは舌である。舌をとほして働く慾には、肉體的のものもあれば、精神的のものもある。肉體的のものとしては、胃の慾とともに働く甘いものを食べたがるやうなもので、精神的のものとしては、おしやべり・うそつきなど、「言葉」のところ（卷一、課七參照）で戒めてあるも

克己自制

のなどがある。こんなものの弊害は我等のすでに知つてゐるところだが、舌を抑へてこれを支配することも、また案外むつかしいものである。

その外、目でも、耳でも、鼻でも、皮膚でも、筋肉でも、油斷をするといろ〳〵な慾の道具になつて、我等のためにならずに、かへつて我等を悪い方へ誘ひ出すものである。我等はこんなものが我等の味方であると同時に、うまくこれを支配しないと、一轉して我等の敵になることを知らねばならぬ。もちろん以上のやうな身體の一部分が慾の持主だといふわけではなく、その持主はやはり我等自身だから、これを抑へるのは、取りもなほさず自分で自分

克己自制と修養

を抑へることになる。そして、これがいはゆる克己自制である。克己自制などといふと、えらいむつかしい修養の方法ででもあるかのやうに思はれるけれども、その實は、右に説いた飲食を節制するやうなことを、廣く精神生活のすべてに推し及ぼしたものに過ぎぬ。

かやうに、その事がらは極めて簡單でも、東西古今を通じて、修養といふと必ずおもに克己自制によつてゐるのは、ちやうど雜草を拔かないと苗がよく育たぬやうに、悪い慾のために人の善い天性が妨げられるし、またこれができると、修養の目的はすでに八分どほり達したといつてもよいぐらゐだからである。しかし、慾でもそのよい

ものはこれを十分に伸ばしてやらねばならぬから、たゞこれを抑へるばかりが修養のすべてではないことはいふまでもない。

二　眞實を愛する心

虛　僞

是非の分別を惑はすもの

およそ是非善惡の判斷は、或程度までは誰にもできるはずだのに、實際は最もわかり易い事がらについてさへ誤つたことをする人の多いのは、これはおもに前に說いたやうに、いろ〳〵のよくない慾にその心を惑はされるからである。だから、人がいつも正しい道を歩んでゆく

昭憲皇太后御歌
かへりみて心にとはば見ゆべきを正しき道に何まよふらん

のには、まづこのよくない慾に打克たねばならぬ。そしてまた、それに打克つためには、平生から自分は良心に反し、道理に合はぬことは一切しないといふ堅い決心をもつてゐることが必要である。こんな心を眞實の心または眞實を愛する心といふ。こんな心が十分具はつてゐると、その人こそ必ずいつも正しい判斷のまゝ、ためらふことなく言ひもし行ひもするから、こんな人が世の中に多くなればなるほど、不正直または不眞面目などといふいろ〳〵の惡德がその勢を失ふわけだから、世の中はどんなに改善され、その國家の品位もどれほど高まるか知れぬ。善い行はいつの世にもあるけれども、それが眞實

虛僞

虛僞を許すぐらゐならば、むしろ窃盗を許すがよい。（フォークランド、イギリスの政治家）

を愛する心から出ないと、時としては僞善に過ぎぬことがある。

眞實の反對は虛僞だから、本當に心から眞實を愛する人は必ず大いに虛僞を憎む。眞實を道德の根本と見る西洋人が、虛僞をどろぼうよりも大きな惡德としてゐるのはそのためである。彼等は、人にどろぼうと呼ばれるよりも、うそつきと呼ばれるのを一そう甚しい侮辱と感じる。そのわけは、どろぼうは人の物を盗むだけだけれども、虛僞は人の心までも盗むから、一そう罪が深いといふのである。だから、子供を躾けるのにも、虛僞を百惡の源として最もこれを戒めてゐる。

虛僞は百惡の源

虛僞と我が國俗

眞實は品性の脊骨

ところが、我が國では、この二つが西洋とは全く反對に考へられてゐる。「うそはどろぼうの始まり。」といふ諺は、正しくうそをどろぼうよりも輕く視るしようこであつて、甚しいのは、「うそも方便。」などと公言して憚らぬことさへある。交際上の世辭などは、心にもないことをいふのがむしろ普通になつてゐる。つまり西洋に比べると、我が國では虛僞がいくらか大目に視られてゐる。そのために我が國民はしば〳〵西洋人などから誤解されることがある。我等は一日も早くこんな惡習を改めねばならぬ。

有名な「自助論」の著者スマイルスが、「眞實は品性の脊骨

眞實を愛する心と學問

である。」といつたとほり、人に接し世に處するのに、眞實を本としないと、世人に相手にされぬから、ちやうど脊骨のない人が眞直に立てぬやうに、りつぱに世の中に獨立してゆけぬ。たとひ一時はうそいつはりで成功することがあつても、いつかは人にその不正を看破されて、遂には失敗に終るにきまつてゐる。

眞實を愛する心は單に道德上に必要なばかりでなく、學問の進歩もまた主としてこの心に基づく。我等が樂しんで毎日の課業を勵むのは、學科の中に含まれてゐる眞理卽ち眞實が、我等のこれを愛する心を滿足させるからである。學者が寢食を忘れて專心研究に從事して、種

修養の第一義

約束と信用

種の發明發見などをするのも、眞實を愛する心が特に盛だからである。利益や名譽ばかりを目的とする研究は、それが得られぬやうになると止んでしまふが、たゞ眞實を愛する心から起つた研究だけは、利益名譽の有無にかかはらず永く續くもので、これが本當の學問である。

要するに、本當の道德も、本當の學問も、もとは皆眞實を愛する心から生ずるものだから、十分にこの心を養成することが、我等の修養の第一義であらねばならぬ。

三　約束を守れ

人と約束してこれを守らないと、人に迷惑をかけるば

違約の弊風

かりでなく、しば〳〵違約すると、遂には全く自分の信用をも失ふやうになる。

我が國でも、昔は一般に國民が約束を重んじ、「武士に二言なし。」などといふ格言もあつて、一旦約束したことは命にかけても果す美風さへあつたが、今日ではこんな美風もだん〳〵衰へて、諺に「紺屋の明後日。」などといふやうなことは商業上などでは少しもこれを怪しまぬやうになつてしまつてゐる。こんな弊風は、たゞ商業上に限つたことではなく、社交上にもまた甚しいものがある。たとへば、集會の場合に、定刻に參集することなどは、どんなにその厲行の必要が叫ばれても、やはり依然として實行さ

よく考へて約束せよ

れぬ。そのため自他の蒙つてゐる損害はどれほど大きいか知れぬ。

それなら、堅く約束を守るのにはどうしたらよいかといふに、まづ自分の力にかなはぬことを約束してはならぬ。約束を違へるのは多くは怠慢に基づくものだが、またその力の及ばぬところから、已むを得ず違約することもある。後者は前者に比べるといくらか恕すべきではあるが、しかし、輕率の責は免れることができぬ。だから、約束する時には、まづ自分の力やその他の事情が、果して約束の履行を許すか否かを考へねばならぬ。その上、我等はまだ父母や先生の監督を受けてゐる身だから、事が

情實をしりぞけよ

らによつては、たとひ約束しても、その許可を受けねばならぬことを忘れてはならぬ。

次には、一切の情實をしりぞけることのできる勇氣が必要である。人から何か頼まれた際に、「はい。」といふのは易いが、「いゝえ。」といふのは案外むつかしい。しかし、履行の望のたしかでないことを約束して、他日人から怨まれるよりは、初に多少氣の毒な思をしてもこれをことわるのが、つまりは自他のためになる。これは誰でも知つてゐることだけれども、その實行ができぬのは、人は誰でも情實になづみ、または名利に誘はれ易い弱みをもつてゐるからである。だから、こんな場合を切拔けるのには、ま

悪い約束

づよく事の是非を考へて、諾否を明言する勇氣を振ひ起すより外に途はない。

約束は必ずこれを守れといふのは、いふまでもなく善い約束についてだけである。後で悪いと氣づいた約束までもこれを守るのは、自分にとつてはその非を遂げることになり、人に對してはその悪を見逃すことになるから、こんな場合には、宜しく斷乎としてその約束を破つて、いさぎよく自分の過を謝し、そして、負はねばならぬ責任を負ふべきである。　さうでないと、この悪い約束を守つた罪の報として、他日一そう重大な責任を負はねばならぬやうになる。

自己に對する責任

約束はたゞ相手に對する義務としてこれを守るばかりでなく、自分の責任上當然果すべきこととしてこれを履行せねばならぬ。相手がその履行を求めぬ場合にでも約束を違へるのは、やはり人をいつはり己をあざむくものである。約束は人に對して結ぶと同時に、また自分に對してもこれを結ぶものである。我等が必ずこれを果さうと決心して人と約束する瞬間には、人の心に對してよりも、むしろ多く自分の心に對して義務を負ふものだから、相手の考がどうであらうとも、專ら自分の心に對する責任として、必ず約束を果すのが、本當に信義を重んずる人といふべきである。

恐ろしい人の力

自分から侮るな

四　自ら侮るな

自　重

昔から、人物といはれるほどの人は、多くは才子からよりはむしろ凡人から、また富貴の家からよりはむしろ貧賤の家から出てゐる。この事實を考へると、人物を作り出すものは生れつきの才不才または親ゆづりの門地・財産などではなくて、自分の奮發勉强であることがわかる。だから、堅く志を立てて努力して已まないと、誰でも相當の人物になれるはずである。

こんなに人の力は偉大だから、この偉大な力を具へてゐる我等は、たとひ身分が低く財産に乏しくても、決して

自覺と自重

自分から侮つてはならぬ。孟子の語に、「それ人必ず自ら侮り、然る後人これを侮る。」とあるが、これはドイツの哲學者カントが、「誰でも自分自身を蟲にするものは、他人から踏まれても憤る權利はない。」といつたのと同じ意味である。せつかく自分の具へてゐる偉大な力を認めることができず、自分から侮つて卑屈な心になるのは、自分自身を蟲にするものである。これに反して、早く自分の力の偉大なことを自覺し、これによつて家のため人のために盡さうとするものは、必ず自然に自重の念を起して、人としての品位をおとすやうなことはせぬ。

どこの國でも、謙遜はとりわけ女子の美德と見られてゐる。それは、謙遜は却つて女子の品位を高めるからである。女子はあまり世のためにもならぬから、何事でも控へめにするのがよいといふ意味で、謙遜を美德と稱するのではない。女子には女子として盡すべき本分がある。その本分さへ盡すと、女子も人として男子に劣るとはいへぬ。男女が各、その本分を盡してこそ社會も進歩し人類も向上するものである。だから、女子は謙遜であつても、卑屈に流れてはならぬ。その上、謙遜の中にも必ず犯しがたい威嚴を失はぬやうに心がけねばならぬ。

謙遜

男尊女卑の弊風

昔は、女子の教育も社會の制度もともに不完全だつたから、女子はその當然盡さねばならぬ本分を盡さうとし

女子の自重

ても、これを盡すことができなかつた。かうして東西ともにいつの間にか男尊女卑の弊風を生じ、久しい間、女子はその人格さへ認められなかつた。今日でも女子がとかくまだ自重の念を缺くのは、こんな過去の事情があるからだらう。

しかし、今日は女子も法律の前には男子とほとんど平等となり、その上、そのなすべき仕事も多くなつたから、大いに自重して、この認められた位置にふさはしい働をするやうに、平素の修養を怠つてはならぬ。とりわけ謙遜の誤解からして、あまりに自分を卑しんで、下品な振舞をし、男尊女卑の弊風は女子自身の招いた罪だといはれぬ

破廉恥

やうに氣を付けねばならぬ。

五　恥を知れ

世には、悪いと知りながらも悪いことをして、平氣でゐるものがある。これを破廉恥の人といふ。破廉恥の人とは恥を恥とも感じないものといふ意味である。普通の人には良心があつて、悪いことをしようとすると、それをさせまいとして反抗する。たとひ反抗しないまでも、ひそかに苦痛を感じさせる。廉恥の心または羞恥の念と稱するものは卽ちこれである。こんな一種の道德的感情があるので、人はなるたけ悪いことを避けて善い行

自責の念

一自分から恥しいと感じる人
二他人から知られて恥かしいと感じる人
三人が知つても恥を感じない人
法律の制裁をうけぬは恥と思はぬ人

をしようとするのである。ところが、破廉恥の人はこの感情がにぶつてゐるから、とかく道德から遠ざかるのである。

恥かしいといふ感じは、良心に對して起るものだから、眞に恥を知る人は、他人の知らぬ過についても、やはり自分を責めるけれども、世には他人に自分の過を知られて、始めて恥かしいと思ふものが多い。中には、たとひ他人にその過を知られても、法律の制裁でも受けぬかぎりは、なほこれを恥と思はぬものさへある。こんな人は孔子のいはゆる「免れて恥なし。」の徒で、いふまでもなく破廉恥の人である。

恥
良心
自重心
廉恥の心
自重心
面目を重んずる

自重心と恥かしさ

面目

恥かしいといふ感じは、たゞ良心に對して起るばかりではなく、また自重心に對しても起る。たとひ良心に對しては少しも疚しくないこと、たとへば、理由もないのに他人から加へられる侮辱などについてでも、非常に恥かしいといふ感じを起すのは、その人に自重心があるからである。世間で通常「面目を重んずる。」といふのは、卽ちこの自重心の外部にあらはれたものである。昔の武士などは一般に自重心に富んでゐて、大いに面目を重んじたので、かりにもこれを傷つけるやうな他人の言行に對しては、少しもようしやせず、場合によつては命にかけても爭つたものである。しかも、この心はたゞ男子にばかり

侮辱の一語

あつたのではなく、女子にも備はつてゐて、そのため女子の品位が大いに高められたのである。

今日、西洋のいはゆる紳士がその面目を重んずることは、ちやうど我が國の昔の武士の風習に似てゐる。彼等は自分に加へられた侮辱に對しては、たとひそれが輕微なことであつても、決してそのまゝ棄ててはおかぬ。西洋では侮辱といふ一語は、聽く人の耳に一種特別な強い感じを與へる響をもつてゐる。そして、これがその社交において一般に禮儀を尊び、とりわけ女子に對しては格別これをつゝしむ習慣を作り、ひいては一國の風俗を健全にする原因となつてゐるやうである。

社會的制裁

責任の觀念とは何か

多數の人が廉恥の心に富み、その上、自重して大いに面目を重んずると、たとひ破廉恥な行をして法網をくゞるものがあつても、社會は嚴重にこれを道德的に制裁するから、一國の風紀を維持することができる。ところが、我が國では今の人は多くたゞ名利を重んずるところから、昔の美風は次第に衰へようとする傾向が見える。我等はこの點について大いに反省せねばならぬ。

六　責任を重んずる心

その轉嫁

道德上我等のなさねばならぬことは、場合によつては、

共同責任

生命に換へてもこれを果す決心がなければならぬ。この決心が卽ち責任を重んずる心である。

今日は大小すべての仕事が共同でなされるから、一人でもその責任を果さぬものがあると、その仕事は滿足にできぬ。各自任意の仕事でも、その成績は全體の仕事に影響する。例へば、我等の勉强は我等の任意にする仕事ではあるけれども、これを熱心にすると、單に我等各自の成績がよくなるばかりではなく、その學級その學校の成績もよくなる。これに反して、我等の或者がよくない行をすると、その學級その學校の名譽を損ずる。こんなに、二人以上が共同で負ふ責任を共同責任といふ。誰でも

個別責任

この世に生存する以上は、共同責任を負はぬわけにはゆかぬ。共同責任は明白に各人に割當てられた責任ではないから、どうかすると忽せにされ易いが、社會の進步、國家の隆昌も、その本は國民の各自が共同責任を覺つてこれを重んずるところから起るものだから、決してこれを輕視してはならぬ。

我等は、こんな一般的な共同責任の外に、その所在の最も明かな個別責任を負うてゐる。我等はこれを果すと否とによつて、直接に是非の批評を受けるから、あるかぎりの力を盡してこれを果さねばならぬ。この際に我等の最も戒めねばならぬのは、その責任を全部自分に引受

責任の轉嫁
仁者は難きを先にして、獲ることを後にす。（論語）

けて、少しも他に轉嫁してはならぬことである。これを果すことが困難な場合でも、まづその罪を自分に歸して、あくまでも自分を責めねばならぬ。種々の口實を設けて、自分の責任を他に轉嫁しようとするのは卑怯な振舞である。

責任を社會に歸する惡傾向

ところが、世にはとかくこの卑怯な振舞を敢へてし、特に今日は自分の過を社會の罪に轉嫁しようとする人が多くなつた。その極端なものになると、社會が人を食べてゆかれぬやうにするから、人が泥坊をするのだといふやうな理窟をいつて、少しも自分の不心得を省みぬものさへある。もちろん、この見方にも場合によつては一理

人としての値うちを無視するな

がないでもない。それなればこそ、昔から貧ゆゑの盜みは多少大目に見られてゐるのである。しかし、こんなものには全く責任がないとすると、人は獨立自主の能力をもたず、たゞ全くその環境に支配される動物のやうなものになつてしまふ。

だから、こんな見方によつて自分の責任を免れようとするのは、自分で自分の人としての値うちを無視するものである。人の罪惡に對しては、もとより社會にもそれ相當の責任があるだらうけれども、我等はそんなことは考へずに、たゞ自分の責任を感じ、他に我等と責任を分けるべきものがあるか否かは、第三者の判斷に一任すれば

功は他に讓れ

よいばかりでなく、更に一歩を進めて、功は他人に讓り、罪は自分が負はうとする覺悟があつてこそ、始めて我等は本當に責任を知る獨立自主の人といはれるのである。

七　自慢と嫉妬

自慢と自重

自慢は一見自重に似てゐるやうだが、その實は甚しく相違してゐる。自重は自分のもつてゐる眞の力にたより、またこれを發揮しようとするものだが、自慢は自分の力を過度に見つもつて、これに滿足し、その上、これを以て人に誇らうとするものである。

自慢の害

我等の知德は、自分で省みてその足らぬ點を自覺し、これをどんなにして補はうかと努力するところから向上進歩するものである。だから、自慢ほど我等の人格の向上と學業の進歩とを妨げるものはない。その上、自慢に心を惑はされてゐる人は、好んで人の短所をさがし出し、これを自分の長所と比較して、人を見さげようとさへするから、必ず人に嫌はれ世に憎まれるやうになる。

昭憲皇太后御歌
高山の影をうつして行く水の低きにつくを心ともがな

修養のために自他の人物を比較して見る場合には、なるたけ自分より優つてゐるものをえらんで、これを標準とすべきである。

自他比較の標準

人物には上には上があつてほとんど際限がないもので、賢人・聖人といはれるやうなえらい人さへあるから、自分より優つてゐるものを手本として、こ

自分で賢いと思はぬ人が最も賢い。（西諺）

自慢と料簡

れにならはうとする心があると、いつも「彼も人なり、我も人なり。」といふ發奮興起の勇氣があつて、決して自分で滿足するやうなことはない。ところが、自慢する人は、この比較の標準を自分より劣つてゐるものに取らうとするから、その知德はだん〳〵退歩する外はない。

また自慢する人が、いふにも足らぬわづかな自分の長所までも衒つて人に誇り、そして、少しも人の長所を學ばうとしないのは、ちやうど器が小さいと少しの水を盛つてもすぐにあふれるやうなもので、つまりその料簡が狹いからである。小さい器はそのまゝ大きくすることがむつかしいが、料簡の狹いのは反省と努力によつて相當

自慢と嫉妬心

高慢なる人は人の譽を以て己の恥とす。（西諺）

廣くすることができるから、我等は常にこれを怠つてはならぬ。

世には自慢の惡いことをさとることができぬばかりか、更に人の長所を見るとこれをうらやみ、遂には嫉妬の心を起して、その人を傷つけようとさへするものがある。まことに卑しむべく憐むべきことである。人を抑へて自分を揚げようとしても、誰の目にも、高いものはやはり高く、低いものはやはり低く見えるから、こんな無益なことに心を苦しめるよりも、自分から省みて自分の缺點の矯正につとめることが肝要である。「能を以て不能に問ひ、多きを以て寡きに問ひ、有れども無きが若く、實つれど

孔子の門人

も虛しきが若くす。」といふ曾子の言は、實に我等の服膺すべきよい教訓である。

八　油斷大敵

失策の多い場合

得るは難く、失ふは易い

人の失策は、事の困難な場合よりも、却つてその容易な場合に多く生ずる。車の怪我が上り坂に少くて下り坂に多いのはその一例である。これは、困難なことをする場合には、心が引きしまつて、十分に思慮をめぐらすのに反して、何でもないと思ふ一念が生ずると、心がゆるんで注意を怠るからである。諺に「油斷大敵。」といふのは、こんなことを戒めたのである。

安心から油斷

事に關する油斷

我等が始めて學校に入つた當座は、心も自然緊張して居て、その日〳〵の課業を勵むけれども、一度試驗によい成績でも得て、これなら大丈夫と思ふやうになると、そろそろ安心して、勉强も怠りがちになり、甚しきはその品行までも惡くするやうになる。これもまた油斷の結果だから、油斷は實に我等の大敵である。

仕事をするのには、その難易に應じてそれ相當の力をつくせばよい。必ずしもいつも大事を取るには及ばぬけれども、人はとかくむつかしいことでも、たやすく見てしまふ傾があるから、どちらかといふと、自分で十分でき

荷子にある語

人に對する油斷

ると思ふことでも、これを十二分にでかす心がけで事に當るがよい。古語に、「百事の成るは必ずこれを敬するにあり、その敗るゝは必ずこれを慢るにあり。」とあるのは、いかにも名言である。初から心に油斷があつて事を企てると、たとひそれが容易なことであつても、失敗が多く伴ふのは當然である。

油斷は事に關してよりも、人に對して更に一そう悪い結果をもたらすものである。仕事の難易はその事に當るとすぐわかるけれども、人の心は元來測り知りにくいもので、中には表面から見るのとは甚しく心のちがふ人もある。これは必ずしも悪い人に限らず、善い人にもず

得るは難く、失ふは易い

ゐぶん見られることである。たとへば、偉さうな顔をしてゐないから無能な人かと思ふと、その實は、諺に「能ある鷹は爪をかくす。」といふやうに、なか〳〵りつぱな人が謙遜してゐるといふやうなことが、世間にはよくある。もしこんな人をつまらぬものと思つたら、意外な失策をして恥をかゝねばならぬ。またうまく人の心を迎へてその氣に入るやうなことばかりいふ人は、誰しも親しみ易いと思ふけれども、こんな人に心を許すと、後になつて悔いることが多い。だから、こんな場合にも、我等はよく油斷大敵の戒を忘れぬやうにせねばならぬ。

元來得ることは難く、失ふことは易い。全身の力を用

絶對の安心を許さぬ

ひてあげた重荷でも、これをはふるのには何の苦もないやうに、多年の努力の結果で成功した千萬長者でも、一旦心がおごり運が傾くと、たちまち無一物になつてしまふ。あつぱれの淑女・才媛も、一時の心得ちがひから、長い間の勉強の功を空しうするばかりでなく、終生拭ふことのできぬ汚名を負ふことさへあることがある。世に誘惑の惡魔はいくらゐようとも、自分だけは大丈夫だと思ふ心が、すでに油斷をしてゐるのである。

そも〳〵人生の行路には登りがあつて降りがなく、いつになつても絶對の安心を許さぬものだから、もしこゝは登りでなくて降りだと思ふやうなことがあつたら、それは心に油斷が生じ、必ず多少の失策がこれに伴ふと心得て、一そう警戒をきびしくせねばならぬ。

駑馬も千里

荀子にある語

力を落すな

九　失望するな

人には生れつき才不才（わしこんなり）があつて、學校の成績も一樣ではないが、古語にも、「駑馬（どば）も十駕（が）すれば千里を致すべし。」とあるやうに、努力して怠らないと、相當に進歩するものである。學業の成績のよくないのは、生れつきにもよるけれども、多くは勉強の足らぬのに原因する。しかしまた、時には最初不成績だつたために、力を落して學習の樂みを失ふのによることもある。こんな場合でも、さらに奮

長所と短所

明治天皇御歌。

世ノ中ノ人ニ後レヲトリマジシ
進マムトキニ進マザリセバ

◎味。
進マウト思フトキ若イトキ
進ンデマカナート世ノ中ニ
出ル時ハヨ後レル

落膽
気ヲオトスコト

發して一度よい成績をとると、新に自信が生じて、その後は學業の進歩がはかゞしくなるものである。

自分の長所を知ることはたやすいやうで、その實はなかなかむつかしいものである。自分の長所は語學だと思つてゐる人が、理科の才をもつてゐたり、自分は數學が得意だと思つてゐる人が、音樂の天才だつたりすることは珍しくない。「下手の横好き。」といふ諺のとほり、好きな學科が必ずしも長所ではなく、嫌ひな學科が必ずしも短所ではない。だから、一時成績がよかつたからといつて安心してはならぬし、また悪かつたからといつて落膽するにも及ばぬ。學校では各學科を一様に修めて、自分の

下手ノ横好キデアルノニ大変スギデアル。

自己發見

悪い成績をとつた時

好きなものに偏しないのがよい。かうして勉強してゐる中には、おひ〳〵自分のほんたうの長所がわかつて來るものである。西洋ではこれを自己發見などといつて、やはりすぐにはわからぬものと見てゐる。

嫌ひな學科でも、勉強のしかたさへよいと、好きにもなり、相當の成績も得られるものである。もし或學科の成績がよくなかつたら、その原因が何であるかを考へて見るがよい。必ず思ひあたることがあるものである。もしそれが自分の不勉強によつたのなら、心をとりなほして大いに勉強するがよい。もしその學科を理解するのに必要な準備が十分でないのによつたのなら、改めてそ

の準備をするがよい。もしまた病氣によつたのなら、早く丈夫になつて追ひつくがよい。數學などの不成績は、多くは最初に十分理解することができなかつたのが、後までもわづらひをするからである。こんなによく注意して不成績の原因をのぞきさると、たとひ生れつき不才の人でも、必ず人なみの成績をとることができる。一度の失敗で落膽するやうでは、何事をしても成功する望はない。

人は希望をもつてゐるからこそ生きてゐられるのである。失望すると半ば死んだやうなもので、絶望すると全く死んだも同樣である。だから、學業に限らず、何事に

ついても希望をすてぬやうにせねばならぬ。一度や二度の失敗で再擧の勇氣を失ふやうでは、自己發見などはたうていできない。希望は人の行手を照らす燈明臺である。我等はたえずこれを見つめて見失はぬやうにせねばならぬ。

一〇　眞譽と虛譽

世人から好い評判を得て社會の尊敬を受けることは、まことに人生の幸福で、誰でもこれを希はぬものはなからう。しかし、時としては評判に相當するだけの値うちがないのに、偶然または誤つて荷ふ名譽がある。こんな

名譽は眞の名譽ではなくて虚譽である。虚譽の永く續かず、その上たつとぶに足らぬことはいふまでもないのに、これをさへ求めるものが多いのは、人情の弱點といふ外はない。そして、こんな心が高じると、遂には不正の手段を用ひてまでも一時の稱讃を得ようとして、知らず識らずの間に悪徳を犯すやうになる。そつと人の力を借りてまでもよい點を取らうとする生徒などは、たしかにその一例としてよい。

けがの功名

また時には偶然の言動が思ひもよらぬ功を奏して、案外の好評を受けることがある。これはいはゆるけがの功名で、よく運動會などにその例がある。これも自分の

眞の力によつて得たものではなくて、一種の虚譽だから我等は決してこんなものに惑はされてはならぬ。

名譽の奴隷

名譽は金錢とちがつて、必ずしも物質的利益をもたらさぬけれども、昔から名利と並び稱せられてゐるほど、人がこれを欲することは金錢にも劣らぬものである。しかし、あまり名譽を欲すると、いはゆる名譽の奴隷となつて、精神的に墮落する。あの世に少くない虚榮心のために一身を誤るものなどは、卽ちこのよい例である。

名譽を失ふたしかな方法は自分からこれを求めることである。（西諺）

功名・手柄

名譽の中にも眞譽と虚譽があり、なほ眞譽の中については、事業が主となるものと、人物が主となるものと區別することができる。事業が主となるものは功名・手柄な

淮南子にある語

どいふ言葉でいひあらはすこともある。しかし、これとても全く人格をはなれると、その値うちが少くなる。眞に尊い名譽はやはり人格の反映である道德的名譽の外はない。だから、人は善いことをたゞ善いこととしてこれを行つて、それで自然に名譽を得るのはよいが、自分から進んでこれを求めるべきものではない。名譽に關しては、古語に「譽むるに足る德を修め、人の己を譽むるを求めず。」とあるやうな高尙な心がけをもつてゐることが肝要である。しかもかうして得た名譽であつてこそ、始めて永久にその人の幸福にもまたその家門の榮譽にもなるものである。

社交の必要

社會の批評

一一 社交

自分と親しいものとばかり交つてゐると、いつの間にか人前に出ることを恐れて、遂には自分で世の中を狹くしてしまふやうになるから、我等は種々の會などにも出席して、相當に人と交際するがよい。しかし、こんな場合に同席するものは、前から知りあひの人ばかりではないから、我等の一言一行は著しく人の目をひいて、評判になり易いものである。懇意な人ばかりなら、少しはしくじつても、あまり咎められずにすむけれども、初めての人にはこんな容赦は望まれぬから、とりわけそのふるまひを慎まねばならぬ。

會の目的にかなふやうにせよ

およそ會にはそれ〴〵何かきまつた目的があるもので、めでたい事のためにするものもあれば、不幸な事のためにするものもあるから、出席者は前もつてその趣意を知つて、それにかなふやうにふるまはねばならぬ。めでたい席で不吉な言葉を口にして人に不快を感じさせてはならぬ。祝はれる人の幸福を本當に慶ぶといふ心持をもつてゐることが必要である。不幸のためにする會では、とりわけ慎み深い態度を保つて、心から弔意をあらはさねばならぬ。また懇親・研究などのためにする會、例へば、生徒の間によく催される級會・學藝會などでは、皆と一しよに樂しむ心持をもつべきで、不平・不滿をいつたり、

訪問・應接

公衆に對する心得

一人でわがまゝなふるまひをしてはならぬ。

この外、親族・知人と交際するのにも、訪問・應接などの際によく禮儀・作法に氣をつけるのはいふまでもなく、とりわけ時をかまはず人をたづねたり、無用の長居をしたりする世間によくある惡習は、必ずこれを改めるやうにせねばならぬ。

すべて多數の人の集まるところでは、とりわけ人の迷惑にならぬやうに心がけねばならぬ。知らぬ人ばかりだと思つて、心をゆるかせにしてはならぬ。電車や汽車の中で通學の生徒が、互に心安いまゝ勝手に人のうはさなどしてゐるのは、まことに聞苦しいものである。誰で

よい手本になれ

も心をゆるかせにして、自他ともに無遠慮なふるまひをすると、互に迷惑を感ずるばかりでなく、遂には一般社會の風儀をも亂すやうになる。世の中は相持で、決して一人の都合だけをよくするためにできてゐないから、自分が人から迷惑をかけられまいと思ふなら、まづ自分が人に迷惑をかけぬやうにせねばならぬ。

社會の風儀はたゞ上流の成人だけによつて保たれるものではない。どんな身分・年齢のものでも、これに對してそれ〴〵相當の責任をもつてゐる。まして、我等は女子として、とりわけ世の中の風儀のためによい手本にならねばならぬから、今から進んでこの責任を負はうとす

集團生活をすすめには
人紀律
之礼儀作法
円滑
愉快、

集團生活と禮儀・作法

る覺悟が必要である。

礼義ナケレバ禽獸ニ劣ル

一二 禮儀・作法

家族といはず、社會といはず、すべての集團生活には禮儀・作法が必要である。禮儀・作法がないと、集團生活は圓滿に行はれぬ。禮儀・作法は相互の交際上すべての人の守るべき言語・動作に關する一定の形式である。すべての人が心のまゝに勝手に振舞ふと、互に衝突して、自他ともに不快を感じ不利益を受けるから、集團生活ではよく紀律を守らねばならぬ。しかし、紀律の目的はおもに人と人の衝突を避けて、その團結を破らぬやうにするのに

あるから、さらにこれを圓滿愉快にするのには、その上なほ禮儀作法を重んずることが必要である。

我等は父母に對し、先生に對し、また朋友その他に對して、その位置身分に應じて、相當の禮儀作法を守らねばならぬ。禮儀作法が守られてこそ、始めて親子師弟朋友その他の關係もよく保たれ、また相互の親愛も永くかはらぬのである。親子の間でも、あまりなれ〳〵しく無遠慮になると、往々不和を生ずることがある。まして師弟朋友の間では、禮儀作法をゆるかせにすると、たうていその間を圓滿にすることは望まれぬ。とりわけ今日のやうに、誰でも始終家を出て廣く世人と交らねばならぬ時代

では、我等は一そうよく禮儀作法に注意せねばならぬ。

ところが、今日の青年男女の間には「僞らぬ告白」などといつて、心に思ふまゝ感ずるまゝのことを遠慮なく口にするのを却つてよいことにしてゐるものがある。人に聽かされぬやうな考を一切心に起さぬことは、聖賢といはれるほどの人にでも容易にはできぬことである。まして未だ修養中である青年男女の考には、ずゐぶん誤つたことやよくないことのあるのがむしろ當然であらう。だから、自分の考を人に聽かせるのには、前もつて心の中でできるだけこれを正さねばならぬ。自分の考を輕々しく口にしてはゞからぬのは、自分の弱點をあらはすば

かりでなく、人に對して敬意を缺くことでもあるから、やがて必ず人の不快を買うて、世間から忌みきらはれるやうになる。

禮儀と作法の區別

禮儀と作法は合して禮といふ一つの意味をなすが、實際上においてはこれを區別することができる。禮儀は冠婚葬祭の儀式のやうなもので、その最も大きなものになると、人に對してばかりでなく、神佛に對しても行はれるものである。こんな儀式は單に實用だけを主とするものではないから、時間や費用の都合だけを考へずに、なるたけその歴史的・道德的・宗教的意味を重んじて行ふがよい。これに反して、作法はおもに日常生活にあらはれて交際上自他の便利をはかることを目的とするものだから、實用に重きをおかねばならぬ。從つて作法には我等の生活狀態の變化とともに改めるべきものが多い。

禮儀・作法の本は人の心

禮儀といひ作法といつても、どれもその本は人の心にあるから、その本を忘れずに、できるだけこれを形式の上にあらはすことをつとめねばならぬ。心のあらはれぬ禮儀・作法はいはゆる虛禮虛儀で、人に好感を與へぬばかりでなく、却つて集團生活の健全な發達を妨げる。古語に「禮は敬のみ。」とあるとほり、禮儀・作法の本は恭敬の心である。己を恭しうして人を敬する心を本とする禮儀・作法であつてこそ、始めてよく交際を圓滿にしようとする

孝經にある語

その人の自然の表現であるかのやうに訓練された作法でなければ効果はない。（エマーソン、アメリカ合衆國の文豪）

差別相（身分・財産・地位・力量）

優越感　平等相　人格　誰も同じ人

目的を達することができるのである。

（自慢）人をばかにする　優越感　勝他（人よりもすぐれる）

一三　尊敬しあひ讓りあへ

およそ人には身分・財産などによる差別はいろ〳〵あるけれども、人であるといふ點では皆同じである。その上、どんな人でも必ず何かの長所をもつてゐるから、よくその長所を認めて、互にこれを利用しあふばかりでなく、また互に尊敬しあはねばならぬ。自分を侮るのはよくないが、人を侮るのはなほさらよくない。自分が人を侮ると、人もまた自分を侮るやうになるのと同じく、自分の人に對する尊敬は、やがて人の自分に對する尊敬となつ

人間には三つの慾いくやせ者　利慾　名聞　勝他

謙讓（へりくだる）　互敬の精神

て報いられるものである。社會の秩序の亂れる原因は種々あるけれども、人が互に尊敬しあふ念を缺くことがその最もおもなものである。互に尊敬しあふ念を缺くのは、その心に誰でも同じく人だといふ根本の觀念が明かでないからである。

今日は、家の内外到るところで、職業も思想も違ふいろいろな階級の人が頻繁に交際して、その關係がすこぶる複雜になつてゐるから、いつ、どこで、人に不快を與へて怨を買つてゐるかわからぬ。だから、各自互に禮儀・作法に注意することがますます必要である。しかも禮儀・作法はたゞ表面的な世辭の交換をするだけのものではなく、

階級の間の憎悪

イギリスの著述家

互に尊敬しあふ精神を本とするものであつて、單に目上の人に對してばかりでなく、目下のものに對してもまたこの精神を失つてはならぬ。

たとひ一部にでも、自分の身分を誇つて人を人とも思はぬ氣風があると、社會の交際はなめらかに行はれぬばかりでなく、これがため階級の間の憎悪がはげしくなる。スマイルスは、「紳士はいちじるしく自分を尊敬すると同時に、同じ筆法で他人を尊敬するものである。」といつたが、こゝに「他人を尊敬する。」といふのは、相手が紳士である場合に限ることではなく、紳士であらうとあるまいと、たゞ相手を同じ人として尊敬するといふ意味である。たと

讓る
利他心
及我利
貪欲

推讓

讓りあひの美德

ひ別に取るに足る長所のないやうな人にでも、諺に「一寸の蟲にも五分の魂。」といふとほり、多少の自重心はあるものだから、もしこれを傷つけたら、必ずその反感を買つて敵を作ることを免れぬ。ところが、スマイルスのいつたやうな紳士の精神が一般に普及すると、禮儀作法も心から行はれて、交際上で侮辱されたと感ずる人も自然に少くなるから、階級の間の憎悪も大いに緩和されるものである。

互に尊敬しあふ念には、必ず互に讓りあふ念が伴ふものである。彼も我と同じく人だといふ考があると、誰でも人に對してわがまゝな振舞などをしないばかりでな

く、何事についても譲られるだけは喜んで譲るやうになる。往來を歩いては路を人に譲り、電車に乘つては席を人に譲り、また場合によつては、利益や名譽までもこれを人に譲るといふ心がけが一般の人にあると、あの見苦しい喧嘩口論などは、自然に世にその跡を絶つやうにならう。我等が日々多少の不快を感ずるのは、多くは人と人の間に衝突があつて、互に相爭はうとする心が起るからである。だから、我等の心に初から互に譲りあふ念がよく養はれてゐると、つまらぬ爭に心を苦しめることがないから、我等は互に快くその日〳〵を送ることができる。イギリス人は、人に足を踏まれた場合でさへ「ごめんなさ

い。」と挨拶するほどに、幼少の時から互に譲りあふ美德を養はれてゐる。ところが、我等はこんな場合に何といふのが常だらうか。我等は大いにイギリス人にかんがみねばならぬ。人が互に十分尊敬しあひ譲りあふやうになると、一國の風俗も高尚・堅實になり、從つて社會の秩序も安全に保たれるに相違ない。

一四　敏活

敏活とは、事をなす場合に、すばやく判斷してすばやく行ふことをいふ。敏活は普通にはおもに言語・擧動のやうな身體の運動についていふけれども、その本は心であ

心の訓練と技巧の練習

る。心がすばやく働くと、多くは身體もまたこれに應じてすばやく動くものである。しかし、時としては心と身體の働が一しよにならぬこともある。例へば、頭の働は鋭くても、言葉が澁り擧動の鈍る人も少くない。これは、心は訓練されてゐても、これを外にあらはす身體上の技巧が練習されてゐないからである。

だから、敏活な人となるのには、その心の働とともに、これに伴ふ言葉・擧動をも練習する必要がある。演說・競技などが練習によつて著しく上達し、また體操のために人の起居振舞が輕快になることは、誰もよく知るところで、事務の見習なども、おもに技巧の練習を目的とするもの

能率と時間

である。つまり頭の中の早い流を筋肉の中でも同じく早く流れさせようとするのには、ぜひともそれに必要な技巧を練習せねばならぬのである。

みだりに成功を急ぐのはよくないが、當面のことはなるたけ早くかたづけるがよい。あせつて事を仕損じてはならぬけれども、すぐできることにまでぐづ〳〵する悪い癖は早く改めねばならぬ。能率を測るのには、必ずその仕事に要した時數を計算に入れねばならぬ。時間にとんぢやくなしにした仕事は、たとひ成績は優良でも、能率の上から見ると、そんなに値うちはないものである。今日は世人が一般に時間を惜しみ、何事にも能率を重ん

言動の敏活

ずる時代だから、我等の言動もこの時代の要求に應ずるやうに心がけねばならぬ。

仕事をすばやくするとともに、言葉・擧動もまた大いにすばやくするがよい。簡單明瞭な言葉と輕快敏捷な擧動とで人に接し用を辨ずることは、今日の眼のまはるやうな忙しい世の中に處するのには最も必要である。要領を得ないうすのろな言動は、仕事の能率を減ずるばかりでなく、人に對しても不快の感を與へ、その上迷惑をかけるものである。

敏活な我が國民

先年の世界大戰の際、ドイツ人がロシヤの軍隊を嘲つて、「彼等は日本人が三日ですることを三週間もかゝつて

敏活の弊

する。」といつたとほり、外國人でさへ我が國民のすこぶる敏活なことを知つてゐるから、我等は益〻この長所を發揮するやうにつとめねばならぬ。しかし、あまりに敏活を重んじ過ぎると、とかくよく考へずに事をするやうになつて、その弊害も少くない。とりわけしとやかであるべき女子がいら〳〵した振舞をするのは、甚だ見苦しいものだから、我等は何事につけても平生から十分に考をめぐらしておいて、さていよ〳〵といふ場合には、いち早くこれを片付けてしまふことのできるやうに心がけねばならぬ。太田道灌の歌に、

急がずば濡れざらましを旅人の

あとより晴るゝ野路の村雨

とあるのも道理だが、またその反對のことを詠んだ高山彦九郎の、

ひとしきり降り來る雨の音聞きて
急ぐに濡れぬ野路の旅かな

といふ歌にも、なかなか深い意味がある。

品位と落ちつき

一五　落ちつきと品位

品位の何であるかは、ちよつと説明しにくいけれども、とにかく、こんなものが人に具はつてゐて、それがとりわけ女子に必要なことだけは、誰でもこれをその感じの上で知ることができよう。品位の最も著しくあらはれるのはその人の態度である。急がず、騒がず、落ちついて、おもむろに物を言ひ事を行ふ人は、いかにも奥ゆかしく思はれ、自然に敬意も生ずるが、これに反して、態度に落ちつきのない人に對しては、たとひその言ふことや爲すことはもつともであつても、何となく輕侮の念が起るものである。

落ちつきの必要

落ちつきはどんな場合にも必要だが、とりわけ危急に迫つた場合などにこれを失はないと、ます〳〵品位を高めるばかりでなく、すべて事を仕損ずることが少い。また平生の社交上でも、落ちつきがないと、たとひ禮儀作法

の心得はあつても、それはたゞ形式にあふだけにとゞまつて、とてもそれで品位を保つことはできぬ。

落ちつきは態度の上に見えるけれども、その本は心にある。だから、落ちつきを得ようとするのには、まづ心からの修養を怠らぬやうにせねばならぬ。我等が事にあうて往々態度の落ちつきを失ふのは、おもに外部の刺戟に應じて起るその時々の感情を抑へることができぬからである。例へば、怒に堪へることができぬと、目に角を立てて口ぎたなく罵つたり、驚を抑へることができぬと、身のたしなみを忘れて、うろたへて騒いだりする。こんな見苦しい態度を示すまいと思ふなら、平生から十分感

落ちつきの本は心

落ちつきと感情

情に對する強い自制の力を養うておかねばならぬ。この外、臆病なために、少し變つたことに遭ふと、顔色を變へたり、身ぶるひをしたりすることもある。こんなことのないやうにするのには、假にも心にやましいところがないなら、何ものにでも恐れるには及ばぬといふ堅い信念を具へ、その上、相當な勇氣をもつてゐることが必要である。

落ちつきはまた知識と密接な關係がある。我等が前もつて十分知つてゐることなら、突然人に問はれても、心に餘裕があるから、格別あわてるやうなことはないが、十分知つてゐない問題に對すると、たいてい先づ心が臆し

落ちつきと知識その他の準備

て、自然に態度の落ちつきを失ふやうになる。そして、その結果往々品位を傷つけるのはいふまでもない。だから、事に當つてあわてまいと思ふなら、自分で知つてゐなければならぬことについては、前もつてよくその準備をしておくことを怠つてはならぬ。古語にも「知者は惑はず。」とあるとほり、狼狽は多くは知識が乏しいから起るものである。落ちつきのためには知識の準備も必要だがその外、すべての點に準備が行屆いて、心に少しの空虛を感ぜぬやうにすると、一層よく落ちつきが得られる。西洋の或學者の言葉に「寸分の隙もなく見事に裝うてゐる」といふ心持は、宗教でも與へることのできぬ内心の安靜

論語にある語

エマーソン

場慣れも必要

といふ一つの感じを與へる。」とあるのは、特に女子の多くがこれを自分自身で經驗するところだらう。

しかし、どんなに感情を抑へたり、知識を磨いたりしても、いはゆる場慣れぬために態度の落ちつかぬこともある。これはちやうどどんなに知勇のすぐれてゐる人でも、始めて戰場に臨むと、ずゐぶんあわてるやうなものであるから、平生なるたけ上品な人と交際して、落ちついた態度を學ぶやうに心がけるがよい。こんなにしてますます修養を怠らないと、我等は遂に我等に大切な品位を身に具へることができるやうになるものである。

身體の健康と精神の健康

健康の增進法

一六　身體のきたへ

西洋の諺に、「健康な精神は健康な身體に宿る。」とあるやうに、身體がすこやかでないと、精神もふるはぬ。勉强をするのにも、仕事をするのにも、第一に必要なのは健康である。身體も精神も活氣にみちてゐてこそ、始めて意のまゝに働くことができる。

身體の健康を保ち、またこれを進めるのには二つの方法がある。その一つは身體を圓滿に發達させることで、これには榮養と運動と攝生の宜しきを得ることが必要である。他の一つは身體をきたへることである。發達はよくても、缺乏や艱難に堪へることのできぬ身體もあ

きたへの効果

獸身を成して後に人心を養へ。（福澤諭吉）

きたへの方法

る。これはおもにきたへが足らぬからである。人の身體は弱いやうでも、一見强さうな獸類などよりも、これをきたへるとかへつて多く抵抗力を增すものである。昔、ギリシャの國に一人の奇人があつて、年中はだかで過してゐた。或日、この奇人がいつものとほり寒中はだかで歩いてゐると、これを見た一人が、「どうしてそんなことができるか。」と問うたところ、彼は「あなたはどうして顏だけ寒氣にさらしてゐることができるか。」と問ひかへし、なほ「私の身體は全部あなたの顏のやうなものである。」と答へたさうである。

各種の體操・競技・遊戲などは、みな身體のきたへを助け

るけれども、これらはおもに身體の圓滿な發達を目的とするものだから、きたへのためには別に適當な方法をえらばねばならぬ。冷水浴または冷水摩擦を行ふとか、肩掛・手袋の類を用ひぬとか、または旅行・遠足などをして、山を越え河をわたるとかいふやうなことは、よく皮膚・筋肉を強健にするものである。とりわけ暑さ寒さに堪へることは、身體のきたへに最も効果がある。元氣の盛な青年期には、進んで暑さ寒さとたゝかつて見るがよい。避暑・避寒は虚弱な人に必要なことで、健康な青年にはむしろ就暑・就寒の方が身體のきたへになつてよい。

きたへには往々危險が伴ふもので、雪中登山などに伴

ふ危險はすなはちその一例である。こんな場合には、前もつてめんみつに準備して、萬が一にも危險におちいらぬやうにせねばならぬ。たゞ向ふ見ずの冒險をして強がるのは愚なことである。こんな人は臆病と思はれるほど細かに用心して出かける西洋の探險者のことなどを考へて見るがよい。

女子はその體質や氣質が男子とはちがふから、男子と同樣のきたへ方をすると、かへつてその健康を害することがある。だから、女子に最も適する方法によつて身體をきたへることを心がけねばならぬ。

身體をきたへると同時に、精神をもきたへるのがほん

精神は身體を支配せねばならぬ。さうでないとその奴隷になられねばならぬ。（ロード、エイベリ。イギリスの學者）

要約

たうのきたへであり、またその一番よいものである。身體をきたへるために精神の發達を妨げ、もしくは精神をきたへるために身體の健康を害してはならぬ。運動にふけつたり、また勉强にこつたりして、一方に偏すると、こんな過におちいることがある。

要するに、きたへは身體と精神をともにすこやかにして、實際に役だつりつぱな人格を作りあげるための一つの手段であることを忘れてはならぬ。

一七　清潔

衞生

清潔をたつとぶ我が國民

清潔をたつとぶ氣風を盛にせよ

我が國民は、昔から身體のけがれはやがて心までも悪くするものだと信じて、大いに清潔をたつとんだのにもかゝはらず、今日では歐米諸國にくらべて、清潔の點では必ずしも特にすぐれてゐるとはいへぬ。

國民をして清潔を重んじさせるのには、たゞ國民各自が衞生に注意するばかりではなく、一般にこの氣風が盛にならなければならぬ。たとへば、きれいに掃除のしてある庭園には、紙屑などでも捨てる氣にはなれぬが、取りちらかした室などに入ると、とかく心がゆるんで、行儀も悪くなるやうなものである。すべてまはりが清潔だと、そこにゐる人も自然に自分の身體を清潔にするやうに

屈原（周代、楚の詩人）の語

一人の不潔が多くの人を不潔にする

なり、身體を清潔にすると、衣服の不潔が氣になつて來るといふやうに、清潔は清潔をさそひ出し、不潔は不潔をさそひ出すものである。古語に「新に浴するものは必ずその衣を振ふ。」といふのは、すなはちこの意味である。

だから、たとへば、我等の一人が不潔をかまはないと、初はこれを不快に感じた傍の人までが、少しもこれを氣にせぬやうになつてしまふ。支那の諺にも「豚を抱くものは、臭さを知らず。」といふとほり、不潔になれると、不潔を不潔と感ぜぬやうになる。これに反して、歐米の學校などでは、いかにもよく掃除が行きとゞき、生徒の間にも清潔をたつとぶ氣風が十分にできてゐるから、中には少數の

清潔の實行には集團の力を要する

公衆衛生

不精者があつても、いつか一般の美風に化せられる。我等も各自に清潔をたつとぶと同時に、この氣風を我等の間に普及させるやうにつとめねばならぬ。まはりが惡くても、自分だけは善い人になれるけれども、まはりが不潔では、自分ばかり清潔でゐることはむつかしい。

このやうなわけだから、清潔はつまりは集團の力によらないと、徹底的には行はれぬ。一人だけ清潔を好んでも、家族の人が皆さうでないと、一家は清潔にならぬ。一軒の家だけ清潔にしても、隣近所までが同じくさうしないと、その土地全體が清潔になることは望まれぬ。そして、これが公衆衛生の必要なわけである。ところが、我が

清潔に關する知識も必要

國民は個人としては概して清潔を好むのにもかゝはらず、その家や土地になると、かなり不潔にしておくのは、清潔を集團的に行はうとする習慣が、まだよくできてゐないからである。清潔法によつて時々强制されて掃除をするばかりではなく、自分から進んで廣くそのまはりまでも清潔にすることによつて、始めて各自の清潔も保たれることに考が及ばないと、清潔をたつとぶ氣風は一般には起らぬものである。

我等は人といつしよに清潔をたつとぶやうにせねばならぬが、しかしまた、各自清潔につゐて正しい理解をもつてゐなければならぬ。世には往々りつぱな衣服・髪飾

學校を清潔にせよ

をしてゐても、案外不潔を氣にせぬものがあり、また中には化粧のために却つて身體を不潔にしてゐるものさへある。これは清潔と美しさとを取違へたもので、美しさはとかく人目につき易いところにとゞまるのに反して、清潔は人目にふれぬところにまでも及ぶものだからである。たとへば、客間の掃除よりも臺所の掃除を一そう念入りにするなどが眞の清潔である。そして、清潔を好む人は、身體の垢ばかりでなく心の垢までも洗ひ落さうとつとめるから、清潔は美しさとちがつて、りつぱな道德である。

いふまでもなく高等女學校は高尚優美な婦德を養成

するのをその目的とするから、そこにはとりわけこの美しい婦德がよくあらはれてゐなければならぬ。もし生徒の衣服・髮飾はりつぱでも、一般に不潔な風があると、そんな學校の生徒の心がけはまだ十分でないといつてよい。我等は清潔をたつとぶ精神を校舍の內外に發揮して、大いに學校の品位を高めねばならぬ。

教科書外の讀物

一八　讀む物、見る物を擇べ

小說の利害

教科書の外にもいろ〳〵よい讀物があるから、課業の妨とならぬ限りはこれを讀むがよい。これをよく讀むと、教科書の助になり、また教科書にない事がらをも覺えるから、知識を增し、修身上の利益を受けることができる。たゞし、これを擇ぶについては、その方法を誤らぬやうにせねばならぬ。たゞおもしろいからといふので何でも讀むのはよくない。なるたけ何かためになる讀物を擇ばねばならぬ。エマーソンの讀書心得に、「出版後まだ一年にならぬ書物はこれを讀まぬがよい。」とあるのは、今日のやうに出版物のほとんど無限に世にあらはれる時代には、讀物の選擇上最もよい注意である。

よい讀物と見るべきものは、まづ教科書と關係のあるものである。その外、一般に課外讀物として學校から示

課外讀物

されてゐるものは、いふまでもなくよい讀物である。

新聞・雜誌と小說

新聞や雜誌の中には、かなり青年に不適當なものもあるから、十分氣をつけて擇ばねばならぬ。小說は概して讀んでおもしろいけれども、往々修身上の害になるものがあるから、これを讀むについては、最もよく氣をつけねばならぬ。

修身と小說

修身は正しい心や善い行のどんなものであるかといふことを說いて、我等が惡を避け善に就くのには、どんなにその心を用ひ、またどんなにその身を處せねばならぬかを敎へるものである。ところが、小說はこんな道德的敎訓を主とするものではないから、たゞ正しい心や善い

小說の害

行ばかりをとらずに、人をありのまゝにゑがき出すものである。從つてその中には、人の惡い心やみにくい行も遠慮なく暴露されることが多い。だから、我等は小說によつて世態・人情を學ぶことはできるが、道德上には往々惡い感化を受けることを免れぬ。

善を知り善を愛し善を行ふことが修養の目的だから、修養を主とする青年期には、なるたけ惡に遠ざかり善に親しむやうに心がけねばならぬ。小說によつてあまり人生の暗い方面をうかゞふと、我等の心までそれに引入れられる恐がある。孔子は、「禮にあらざれば視ること勿れ、禮にあらざれば聽くこと勿れ、禮にあらざれば動くこ

實際との衝突

と勿れ。」と敎へた。これは惡を惡として嫌ふやうになるのには、まづ善によつてその心を固めておかねばならぬから、平生なるべく惡いことに近寄らぬやうにせよとの意味である。

また小說には多く實際とかけはなれた想像を書いてあるから、これをそのまゝ信じて世の中を見ると、不平不滿に堪へぬことばかりである。その上、作者によつては、なるたけ讀者の心を捉へようとして、過度にその想像や感情を刺戟しようとするものがあるから、こんな小說に讀みふけると、意志の力が弱くなつて、勤勉努力を厭ひ、物事を冷靜に考へることができぬやうになる。我等は元

よい小說

人の心の奧に光を送るのが藝術家の役目である。（シューマン、ドイツの音樂家）

氣の盛な青年期に於て、他日のために大いに勉强せねばならぬのに、この大切な元氣を何にもならぬ讀書によつて磨りへらすやうでは、將來の成功はおぼつかない。世には往々小說のために心がすさんで、その身を誤る青年も少くないから、我等は深く戒めねばならぬ。

たゞし、小說の中にも有益で、青年に適するものもあるから、こんなものは暇の時にこれを讀むのはさしつかへがない。また深遠な思想を含む大家の小說は、その眞意を玩味するのに相當な學識と經驗を要するから、これらは年が長じて後に讀むがよい。たゞ絕對に讀んでならぬのは、その思想が俗惡でその上危險な小說である。し

活動寫眞

かし、小說でも、その他の讀物でも、その種類はほとんど無數であつて、その中から適當なものを擇ぶことは我等にはとてもできぬから、これは必ず父母や先生のさしづに從はねばならぬ。

また見るものについては博物館・展覽會などで、とりわけ教育の目的をもつてゐるものは自分から進んでも見るがよいが、近年ます〳〵盛になる活動寫眞はたいがい娛樂本位で、俗惡卑猥な小說を眼で見るやうな映畫も少くなく、その上、建物の衞生的設備にも缺點が多く、これはとりわけ年少者には有害無益だから、なるたけ避けるがよい。西洋諸國でも深くその弊害をさとつて、すでに父兄の同伴のない年少者の活動寫眞館入りを法律で禁じてゐるところもある。たゞし、これにも、小說の場合と同じく、そのよいものについては除外例のあることはいふまでもない。

一九　聖世三代（上）

踐祚後朝見の儀の勅語

今上陛下が踐祚後朝見の儀の勅語に、「惟フニ皇祖考叡聖文武ノ資ヲ以テ天業ヲ恢弘シ內文教ヲ敷キ外武功ヲ耀カシ千載不磨ノ憲章ヲ頒チ萬邦無比ノ國體ヲ鞏クセリ皇考夙ニ心ヲ養正ニ宅キ廼チ志ヲ繼明ニ尙クス」と仰せられてゐるやうに、明治・大正兩天皇の御治世の間に、我

我が國運の大發展と明治天皇

が日本帝國は隆々旭日の昇るやうに勃興し、これを英邁無比の今上陛下が承けさせたまうて、今は世界一等國中の重位を占めるやうになつてゐる。　その中でも、明治天皇の御人格・御勳業は、特に明治節を新に定められて、これを永久に記念させられるのでも知られるとほりだから、次にその一端を記し奉る。

明治天皇は實に崇高雄偉の御人格にまし〳〵た。　御在位四十六年間に、我が帝國が東洋の一小島國から一躍して世界の強大國の一つとなつたのは、悉く天皇の賜である。　そこに至るまでの經過を顧みると、我が帝國は數次危機に際したこともあつたが、幸に天皇の聖斷によつて、何等の蹉跌もなく、國運は愈〻堅實に發展した。　しかもこの發展は物質・精神の兩方面にわたり、その上文武のどちらにも偏せず、よく天皇の高大圓滿な御人格をあらはすものだつた。　我が明治の國運は、實に一種の超凡神明の力によつて指導されたので、こんなに迅速にまたほとんど完全に近い大發展をなしたのである。

超凡神明の力

明治天皇の御人格は世に洩傳へられてゐる平生の御起居や多くの御製などで想像し奉ることもできるが、それよりも、御治世四十六年間の我が國家の進歩の成跡こそ、最も明白に天皇の御人格を事實の上で語るものである。　世界の人々はこの進歩の成跡と、この成跡を遺した

事實が天皇の御人格を語る

近世史上の英主と明治天皇

まうた明治天皇とを併せて、一種人間の驚異と視てゐる。

近世史上では、世界に多くの英主が出てゐる。ドイツ帝國を再建したウィルヘルム一世や、イタリーを統一したヴィクトル、エンマヌエルはその中の最も著明なものである。そして、それらの英主には皆非凡拔群の人傑があつてその事業を補佐し、しかもその補佐者は人物としては君主にも優り、またその盛名も君主の上に出てゐる。ビスマークのウィルヘルムに對する、カヴールのエンマヌエルに對する關係は卽ちそれである。特にドイツでは、ビスマークのウィルヘルムであつて、ウィルヘルムのビスマークではないとまでいはれたほど、一時はビスマ

明治天皇と維新三傑

理想の帝王

ークの威勢がよかつた。ところが、我が國では、いはゆる維新三傑などでも、明治天皇の御人格とはもとより比較にならぬ。彼等は皆精忠を勵み勳功も多かつたが、しかし、結局は彼等が天皇を大きくし奉つたのではなくて、むしろ天皇が彼等を大きくしたまうたのである。三傑の後にも多くの文武の名臣が輩出して、各よくその才を伸ばしその能を盡して、國家のために盡瘁した。しかし、彼等は皆ちやうど遊星が太陽の光を浴びながらこれをめぐるやうに、天皇を中心と仰いで、その叡慮のまゝに働いた。天皇は實に人を知る明鑒と人に任ずる宏量とを併せ備へたまうた理想の帝王でまし〳〵た。

明治天皇御製

古のふみ見るたびに思ふかな
おのが治むる國はいかにと

二〇　聖世三代（下）

横井小楠の感想

明治の初に、横井小楠が天皇に拜謁を賜はつた時の感想を書いたものに、「主上日々御出座、議定參與を召出され、萬事聞召され候。（中略）御容貌は御長顔、御色は淺黑くあらせられ、御聲はおほきく、御背もすらりとあらせられ候。御器量を申しあげ候へば、十人並にもあらせらるべきか。たゞ〳〵並々ならぬ御英相にて、非常の御方、恐悅無限の

並々ならぬ御英相

天成の英主

至に存じ奉り候。」とある。これは維新後間もない時のことだから、天皇はその御齡がまだ二十歳に達したまはなかつたのである。それだのに、その人に與へたまうた印象は既にこのとほりだつた。明治天皇は實に天成の英主でまし〳〵た。それなればこそ、

四方の海みなはらからと思ふ世に
こゝろ[illegible]なる。　など波風の立ちさわぐらん

世界[illegible]あさみどり澄みわたりたる大空の
[illegible]ひろきをおのが心ともがな

といふやうな、尋常歌人のとても思ひ浮べることのできぬ高く大きく神々しい調子の御製も、自然に遊ばされた

世界に欽仰された明治天皇の御人格

明治天皇の崩御とロンドンタイムスの弔詞と讃辭

のである。

明治天皇の御人格は、我が國民だけが仰ぎ見るのには、あまり宏大に過ぎる感がある。天皇の御人格は實に世界に認められて、世界各國民の齊しく欽仰して已まぬところである。天皇の崩御の報に接して、追慕・哀悼の聲は世界の到る處に起つた。今その中の著しいものを擧げると、イギリス第一の新聞ロンドン、タイムスの天皇の崩御を弔し、深く悼惜の意を表して、「もし陛下にしてその勳業に伴ふほど偉大に見えさせたまはずとせば、そは陛下の御謙讓なる、夙に誇衒的行動を惡みたまひしが故なり。」といひ、「仁愛は陛下の御性格に於て顯著なる一特質なり。」

フランスの新聞と明治天皇

といひ、「陛下は眞に帝王たるの資質を有したまへりといふべく、その人物の鑒識に於てかつて誤りたまへることなし。」といひ、「東洋に於ける最初の立憲國の君主にして、またよくあらゆる立憲國君主のために好箇の模範となりたまへり。」といひ、「陛下は偉大なる時代に於ける偉大なる統治者におはしましき。世はいかに變り行くとも、陛下の御芳名に至つては永遠青史に赫灼たらん。」などといつてゐる。

またフランスの有名な新聞に散見する天皇に對する讃辭の中には、「陛下は萬能なる魔術師とも申すべく、明治元年まで中世時代の國の如く遺存したる日本をば、世界

アメリカ合衆國の新聞と明治天皇

的大強國となしたまへり。」といひ、「國民の啓導者たる非凡絶倫の大英主は他の列強國民が數百年に經過し來れる途を、日本には僅々二十五年を出でずして經過せしめたまへり。」といふやうな類が多い。その外、アメリカ合衆國などの新聞にも、いかにも天皇の御人格に極めてふさはしいと思はれる雄大な讃辭が多く掲げられた。「陛下は國民の中心、日本の太陽、その國家的綠門（アーチ）の礎石たり。」といふやうなもの、または「陛下は新日本の旭日にして、東洋に於ける絶大なる覺醒（ウェケセ）の主因をなしたまへる一大精神におはしましき。」といふやうなものの外、なほ多くの剴切（がいせつ）な讃辭がある。

世界を擧けて明治天皇の御仁德をたゝへた

御三方の御坤德

特にこれら多數の新聞紙がほとんど一致して、明治天皇の御仁德をたゝへ奉つてゐるのを見ると、天皇の御人格のいかに世界の人々に敬重され、その上好影響のいかに廣く人心に及んでゐたかがわかる。我等は常に明治天皇の盛德大業を憶（おも）ひ、同時に大正天皇の繼明の御志にも對へ奉ることを忘れてはならぬ。そして、これが我等が夙夜（シュクヤ）兢々として明徵紹述につとめたまふ今上陛下の叡慮に對へ奉るゆゑんである。

かやうに、三代の聖世は明治天皇以下の御乾（けん）德によつて開かれたとはいふものの、こゝに我等の忘れてはならぬのは、明治天皇・大正天皇を內から助けまゐらせたまう

昭憲皇太后御歌
大宮のうちにありてもあつき日をいかなる山か君はこゆらむ

海犬養岡麿の歌

た昭憲皇太后・皇太后陛下及び今現に今上陛下を助けまゐらせたまひつゝあらせられる皇后陛下の御三方の、世にも稀ないや高い御坤徳である。三代の聖世は、いはば天高く覆ひ地厚く載せて、その間にめでたくあらはれたのである。

御民われ生けるしるしあり
天地の榮ゆる時に逢へらく思へば

よい慾と惡い慾

追録

本文の處々について、多少その所說を深め、もしくはこれを廣めて、餘力のある生徒の自學自習の用に供へる。

一 抑へよ、そして支配せよ

克己自制

慾を抑へることばかりに力を入れ過ぎると、いはゆる「勿れ主義」の消極的道德になつて、人を萎縮させてしまふから、むろんよい慾は大いにこれを伸ばしてやらねばならぬ。どちらかといふと、よい慾を伸ばすことによつて惡い慾の發展が妨げられるやうにするのが、一番よい修養の方法である。例へば、活潑に運動競技などをしてゐると、自然いろ〳〵のよくない考も起らないですむやうなものである。またどうせ我等は勉强ばかりし

娯樂

善の追求

てはゐられず、多少の娯樂を要するものだから、よい娯樂をえらぶやうにせねばならぬ。娯樂といふと一切惡いことと考へて、これを抑へるのはまちがひである。たゞし、娯樂にはいつも多少の危險が伴ふから、これに對して警戒を加へねばならぬ。要するに、慾を抑へるについては、我等はいはゆる「角を矯めて牛を殺す。」といふ弊に陷らず、原則としては、我等の善の追求はあくまで積極的であつて、たゞこの目的を達するための手段として、惡い慾を抑へるやうに心がけるべきである。道德は、人につゝしんで惡をなすなと戒めると同時に、進んで善をなせと呼びかけてゐるものである。

二　眞實を愛する心

虛偽

虛偽の種類

アメリカ合衆國の心理學者

虛偽には想像的虛偽・利己的虛偽・愛他的虛偽及び病的虛偽などの種類がある。想像力の強いものはとかく事實に合はぬことをいふ。これが想像的虛偽で、その例はよく子供について見られる。實際打たれもしないのに相手が打つやうな樣子をしたので、彼の想像力はこれを實際打つたことにしてしまふ。次に、自分の利害に關するところから心にもないことをいふのが利己的虛偽で、世間に最も多くある虛偽である。臆病のためにうそをつくのはこの種の虛偽の中に入れてよい。愛他的虛偽とは學生の間にも往々見られる同級生を救つてやらうと思ふ義俠心などから、先生に對して不實の申出をするやうなもので、スタンレー、ホールはこれを英雄的虛偽と名づけてゐるけれども、その虛偽であるのに相違はないから、いふまでもなく惡い事である。普通の虛偽は、これをいふものはその虛偽であること

社會的虛僞

ビスマークとカヴールの問答

を意識してゐるけれども、病的虛僞にはこの意識が缺けてゐる。だから、この場合には平氣でうそをつくばかりでなく、まんまと人を欺き得たことの勝利を大いに喜ぶことさへある。青年には往々勝氣からして何となく大きなことをいふ癖があつて、これが高じると、いつか病的虛僞になつてしまふ恐があるから、よく氣をつけてその矯正をはからねばならぬ。以上の外、社會的虛僞などといふものを區別する人もある。時の社會の風潮に調子を合せて行くために、知らず識らず心にないことをいふのは、必ずしも利己的動機から來るのではないから、これはやはり別種の虛僞と見てよい。その例は比較的氣の弱い女子にとりわけ多い。

「うそは惡德だと知りながらも、どうしてもいくらかこれをいはぬわけにゆかぬ場合がある。こんな場合には、我等はどうしたらよいかといふに、なるたけ沈默する外はない。或はもしできることなら、こんな場合をなるたけ避けるがよい。」とは、ビスマークの問に對するカヴールの答だが、我等のためにもよい參考にならう。

ドイツの宗教改革者

ドイツの文豪

○うそは雪だるまのやうに廻せば廻すほど大きくなる。（ルッテル）

○弱ければ弱いほどうそが多い、強い力は眞直に歩く。（エアン、バウル）

道德の發達と社會の制裁

三　約束を守れ

道德はその自然的である點にその特別な價値が認められるけれども、その健全な發達にはやはり社會の制裁が必要である。社會の人々がこぞつて褒めるか咎めるかする言行はとにかくよく發達する。戰時中はどの國民でもすべてが勇者であるや

うに見えるのは、すなはちその一例である。約束を守りうそをつかぬことでも、社會の制裁がこれを後援しないと、その國一般の風習になるまでには至らぬ。だから、せめて學校内だけにでもこの制裁がきびしく行はれると、我等も約束を守るくらゐのことは必ずこれを實行するにちがひない。我等は個人的に修養すると同時に、社會的制裁の力を守り立てねばならぬ。今日のやうに堅く約束を守るものを却つて愚直者扱ひにするやうでは、約束を守る美風はとても一般に起らぬ。

周代、楚の學者

○信、義に近ければ、言、復むべし。（論語）

○輕く諾するは信寡し。（老子）

四　自ら侮るな

自重と自信

國民の中堅

自　重

人から褒められると、急に自分のえらさを感じて自惚れるものがあるが、これは自重に似てその實はさうでない。こんな人は自分の身を人から上げ下げしてもらふものだから、反對に人からけなされるとまた急に小さくなつてしまふ。自重は自分を自分で支持するものでなければならぬ。自信に基づく自重こそ本當の自重といふべきである。ところが、まだ我等の年頃ではこの自信が十分に起らぬから、どうしても自分を輕んずることを免れぬ。だが、我等はこの際でも、よく他からどういふ期待を自分にかけられてゐるかを考へて見ねばならぬ。自分でこそ自分を何でもないと思つてゐても、他では高等女學校の生徒に對して、これが將來我が國の女性を代表するものだといつて、かなり大きな期待をもつてゐる。だから、制服のまゝの學校

生徒の卑しい擧動でも見ると、非難を加へずにはおかぬ。しかし、自重といふことを、あの謙遜と相容れぬいたづらにもつたいぶることと取りちがへぬやうに氣をつけねばならぬ。あの自分の身のほどを顧みないで、誰にも頭を下げず、誰とても同等になりたいと望むのはたゞの負嫌ひで、こゝにいふ自重ではない。眞理の前、正義の前にはどんなに低くでも頭を下げるのが却つて本當の自重である。

ドイツの詩人

○自信を得たら生きることが分る。（ゲーテ）

○人必ず自ら侮つて而して後に人これを侮る。（孟子）

八　油斷大敵

得るは難く、失ふは易い

戒むべきは得意の時

今日のやうに有形無形の刺戟がたえず人の心身を緊張させ、且、文書に講演にあくほど人の處世上の心得を敎へてゐる時代では、誰でも油斷の大敵だくらゐのことは十分承知してゐるけれども、事後に於て考へて見ると、その失敗がやはり油斷から起つてゐるものが多いのを見出すのが常である。そして、その油斷が、いつも少し得意になりかけた際に生ずることも、どの場合にも殆ど共通してゐる。自轉車に乘る人、馬に乘る人などがどんな場合に多く怪我をするかを見ると、この道理は誰にでもよくわからう。だから、我等の最も戒心を要するのは、何事についても、もう安心だといふ半熟半成の際であつて、孟子が「敵國外患なければ國恒に亡ぶ。」といつたのは、これを人の身の上にも應用してよい敎訓である。

名譽心と義務心

一〇　眞譽と虛譽

正しい道をふみ、善い事をして世人に褒められるのが眞の名譽だから、本末をいふと、義務をつくすのが本で、名譽を得るのが末である。だから、我等は不名譽なことをしてはならぬけれども、平生の心得としては、何が名譽で、また何が不名譽だかを考へて、その進退をきめるよりも、たゞ專心その義務をつくさうとつとめるがよい。さうでないと、たとひ眞の名譽のために善い事をしても、その行はやはり人に褒められたさにするもので、こんな人はどうかすると名譽を得る望がないと、そのなすべきこともなさぬやうになるから、本當の道德の人にはなれぬ。もちろん、人から一切の名譽心を取りあげることはむつかしくもあり、またそれにも及ばぬけれども、たゞ青年の頃は概して名譽心が義務心よりも強いのが常だから、我等はとりわけ義務心の養成に心を用ひねばならぬ。人に褒められようが褒められまいが、自分の心にすまないと感ずることをなるたけせぬといふ習慣を作るのが一番大切で、また比較的行ひ易い方法である。名譽といふ報酬が伴はないと、一切善い事をせぬやうな人は、あのただ目の先につるされてある肉が食べたいので櫂(たり)をひいて行く雪國の犬のやうなもので、人としてはまことに卑しむべきものである。

虛榮心と自重

虛榮心は女子に限つたものではなく、男子にもあるけれども、この心のために身を誤るものは、男子の方よりも女子の方に多い。とりわけ女子にはわづかにその身を着飾ることなどで、その虛榮心を滿足させるものの多いのは、女子にまだ本當の自重の念が乏しいしようこで、我等の深く反省すべき點である。同じく人に褒められたいにしても、こんなつまらぬことで褒めら

れようとするのは、その希望があまりに小さく、また低いといはねばならぬ、今日はすでに女子の位置を高くするのに必要な名譽のためにも十分に廣い天地が開かれて、女子が自分で進んでこれを取るのを俟つてゐる。こんな時代に逢ひながら、ちやうど子供が玩具以外に貴いものを知らぬやうに、女子は相變らず衣裳・髮飾の末に最も強い執着心をもつてゐるやうでは、その前途のほども悲觀されるではないか。

禮の本旨

一二　禮儀・作法

禮といふと、貧富・貴賤の別を明かにするため、とりわけ目上の人の威嚴を維持するために必要なものだから、これを守らねばならぬのは、もつぱら目下の人が目上の人に對する場合に限るやうに思ふのは昔風の考で、現代には適せぬ思想である。それ

大いに爲すあらんとする君には、必ず召さゞる所の臣あり。（孟子）

論語にある語

ばかりでなく、昔でさへ孟子が「君の臣を視ること土芥の如くなれば、臣の君を視ること寇讎の如くす。」といつてゐるやうに、國王でも相當に禮をもつて國民に臨まないと、その位置に安んずることができなかつた。それで、當時はとりわけ國民中の賢者といはれるほどの人物に對しては、用事があつてもこれを呼びつけないで、國王自身でその家を訪うてその意見を聽くくらゐに禮を厚くしたものである。まして今日のやうに國民全體の文化が進んだ時代に、目上の人に對しては度を過ぎる程ていねいに禮をつくしながら、目下の人に對してはわうへいな態度をとるやうなことは、全く禮の本旨を忘れたものである。古語に「禮の用は和を貴しとなす。」とあるやうに、禮はもと人と人の間を融和するために起つたものだのに、もしこれをたゞ目上の人にその威嚴をそへるためにばかり用ひたら、禮は却つて人々の間に

敬稱

反感を起させる原因になる。だから、我等はよろしく上の人に事へる禮を學ぶとともに、同等の人とも交り、また目下の人にも接する禮をも學んで、とりわけ目下の人と思ふ家の使用人などに對しては禮を缺かぬやうに氣をつけねばならぬ。恐多いことだが、皇后陛下を始め奉り皇族妃殿下方の臣下に對して、どんなにていねいなやさしいお言葉を用ひたまふかを拜聞したものは、恐らく誰でも自分のこれまでの心がけのあさはかであつたことに氣づいて深く恥入るだらう。もちろん、こゝにいふ上下は同じ臣民同志のことで、皇族に關しては、皇室典範で、天皇・太皇太后・皇太后・皇后の敬稱は陛下、その他の皇族方は殿下の敬稱を有したまふことが定めてあるから、我等はいふまでもなくこの定めに從ひ、なほその上に、すべて慣例によつてとりわけ敬禮を愼重にすることを忘れてはならぬ。

禮と交際

論語にある事實

昭憲皇太后

禮は交際の初には厚くしても、親しくなるにつれて、おひ〳〵これをゆるかせにするのが人の常だが、そのためにいつとはなく互に感情を害して交際が永くつゞかぬことがある。そこで、孔子は晏嬰といふ齊の名宰相が人と交つて、いつまでもこれを敬するのを見て、これこそ善く人と交るものだといつて、大いに感心してゐるが、これは今日でも極めて必要なことで、心安くなつた後に、不用意な一言で長い間親しんだ友だちが互に仇敵になつてしまふことさへある。あの御婦德の古今にすぐれさせられた昭憲皇太后が、明治天皇に御挨拶あそばされるときには、いつ、どんな場合にでも、必ずうや〳〵しく御手をついて天皇に對したまうたといふことである。

一七　清潔

公衆衛生と傳染病

衛生

公衆衛生思想の發達してゐるかゐないかは、衛生施設の整否の外、國民が傳染病の害毒などをどのくらゐ恐れてゐるか、その程度を考へないとわからぬ。學校から品行を誤つた生徒が二三人出たといふと、世間では大騒をするけれども、學校に傳染病が侵入したといつても、さほどの問題にせぬのが、今日の我が國民の常態だとすると、我が國民の公衆衛生思想はまだ幼稚だといはねばならぬ。西洋諸國ではもうその黴菌が種切で研究に困つてゐる赤痢・腸チブスなどが、我が國では現にほとんど年中行事のやうに流行して、これを一擧に根絶し得ないのは、文明國の體面を傷つけるものである。一人の不注意が原因で莫大な國費をむだにし、幾萬幾十萬の人命を奪ふことさへあることを思ふと、我等は十分に衛生思想の養成につとめねばならぬ。

讀物の選擇は今日特に必要

娯樂本位

一八　讀む物、見る物を擇べ

小說の利害

書物さへ多く讀むと賢い人になるやうに思つたのは、昔のやうに書物といふと主として教訓的のもので、しかもその數も多くなかつた時代のことで、今日はさうはゆかぬ。昔は書物の多いことを形容して、牛に汗し棟に充つといつたに過ぎなかつたが、今日はこれを天地をたゞよはす洪水にたとへるほどその出版が非常に多くなつた。だから、その中には讀んで却つて害になるもののあるのも已むを得ぬことだらう。その上、今日の書物の多くは娯樂本位にできてゐて、誰でも讀むなといつても讀みたがるから、今日は我等の書物に對する考もよほどこれを改めねばならぬ。昔でも孟子が「盡く書を信ずれば書なきに如かず。」といつたのを始として、すべて書物を讀むのにはまづその選

小說

書物の利害

擇をつゝしむべきことをさとしたものが多かつたが、今日ではとりわけこの點に注意せねばならぬ。手當り次第にたゞ多くの書物を讀むとたとひよい書物を讀んでも、往々一種へんくつな人になつてしまふことがある。とりわけ刺戟の強い小說などに熱中すると、はては運動をきらひ勤勞をいやがつて、いつか快活な氣象を失つて、神經質な人になることが多い。

書物ほどよくこれを利用すると修養の助になるものはないが、その利用を誤ると、またこれほど害になるものはない。書物はちやうど劇藥のやうなもので、用ひやうでは人を生かしもすれば殺しもする。だから、書物はたゞ多く讀むべきものだといふのは、とりわけ今日のやうな時勢には合はぬ思想である。今日はどちらかといふと、書物の利を考へると同時に、その害をも併せ考へねばならぬ時代である。現に西洋の一部では、人格は

晴耕雨讀

讀書者の戒

書物の上でなく實地の作業の上で鍛へあげるべきもので、文字の上の知識などはあまり實用にならぬといつて、大いに青年の讀書熱を抑へようとしてゐる教育者があつて、ちやうど支那の昔にあつた「晴耕雨讀」に似た說をさへ唱へてゐる。これはもとより極端に走つた意見だけれども、讀書萬能の說をいだくものにはよい參考にならう。

伊藤仁齋は「書を讀むは當に砂を淘して金を拾ふが若くすべし。」取ることはその廣からんことを欲し、擇ぶことはその精からんことを欲す。」といつてゐるがこれこそ讀書者の守るべき第一の戒であらねばならぬ。今日の書物の擇び方を見ると、たゞその新しいといふことを第一の標準として、書物の內容よりもその出版の日附に重きを置くのは、これは書物を報道本位の日刊新聞などと同視して、これでたゞ自分の好話題を作り、好奇

活動寫眞

心を滿足させようとばかりするからだらう。しかし、これでは、我等は永遠に利目のある精神上の滋養を書物から取ることはたうていできぬ。

しかし、書物はたとひおもしろい小說でも、文字をとほしてその書いてあることを想像させるだけだけれども、活動寫眞になると、その筋道を俳優が實演するのを寫して見せるから、その刺戟はほとんど實際を見るのと同じくらゐ强烈である。從つてその惡いものに誤られるものが小說の場合よりも多い。不良少年少女には活動好きなものがとりわけ多いのは、恐らくそのためだらう。今は都鄙ともに活動寫眞全盛の時代だから、我等はこれに對して最も警戒をきびしくせねばならぬ。

□新制女子修身教本□

大正十年十一月廿七日印刷
大正十一年二月六日訂正再版印刷
大正十三年十月十八日修正三版印刷
大正十三年十二月廿四日訂正四版印刷
昭和二年十月十八日修正五版印刷
昭和三年二月七日訂正六版印刷

大正十年十一月三十日發行
大正十一年二月九日訂正再版發行
大正十三年十月廿一日修正三版發行
大正十三年十二月廿七日訂正四版發行
昭和二年十月廿一日修正五版發行
昭和三年二月十日訂正六版發行

著作者　湯原元一

發行者　東京市小石川區小日向水道町八十四番地
株式會社東京開成館
代表者　松本繁吉

印刷者　東京市牛込區榎町七番地
荒屋芳郎

發行所　東京市小石川區小日向水道町八十四番地
株式會社東京開成館
（口座）東京第五三二二番

定價　〔一卷〕金四三錢　〔二卷〕金四六

日清印刷株式會社印刷